資料館の先へ ①

フィールドに来てほしい

1，　開館は出発点、試される瞬間

「四日市公害と環境未来館」が３月２１日開館するようです。今は急ピッチで内装・展示の仕上げをしてみえることと思います。永らくわたしたちが要望してきた「公害資料館」が博物館の一部に間借りするように始まるのはそれ自身歴史の、わたしたちの闘いの進歩です。しかし、これは闘いのゴールではありません。開館されるその瞬間は公害資料館が四日市公害をキチンと総括しているか、各方面への配慮のため極めて不十分なものになっているかが問われる瞬間なのです。

2，　評価は入館者数ではなく、中味

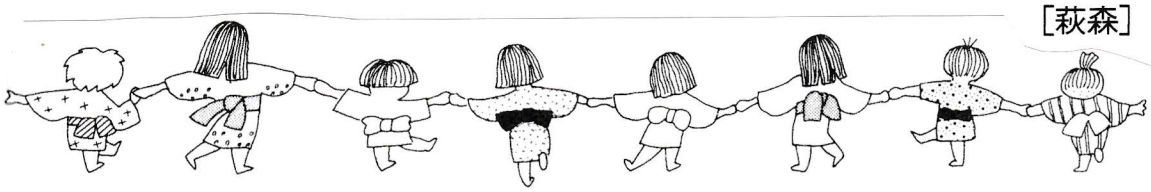
数値は重要でしょう。新しい施設の費用対効果や検証は入館者数ではかられがちですが、それは数年もすれば自ずと結果は見えてきます。問題は中味がどれだけ、患者や市民の側に寄り添っているか、もう少し厳密に言えば、公害裁判の判決に沿った内容となっているか、そこが眼目でしょう。私が樋口勝哉さんから預かり託した裁判の判決全文は展示され、その中味はキチンと紹介されるのでしょうか。

3，　たとえコアだとしても

資料館はコアで周辺の施設・場所はサブフィールドだと今まで企画の段階で聞いてきました。

私は逆さまで、フィードこそが原点で、資料館はその復習場所だと思っています。ですから、コアにはそのフィールドのエッセンスが展示されていて当然です。もちろん企業の論理があっていいのです。行政の施策の経緯もあっていいでしょう。しかし、居直り・弁解でなく、正直で、謝罪がなければ再び同じ道（公害を出す）に歩み出すに違いありません。

4，　フィールドを見ずして分かったと言えるか

例えば登山口に今から登ろうとする山の博物館があったとします。その博物館でいくらしっかり勉強したからといってその山に登ったことにはなりません。公害資料館が市民の声や行政の努力ですばらしいものになったとしても、わたしたちは来て欲しいのです。わたしたちは磯津にいます。磯津を欠かして公害の歴史も公害の今も語れないでしょう。わたしたちは待っています。そして、乞われるならささやかな知識と今までの学びで、説明と共感のための役を買ってでることに労をいとわないでしょう。

［萩森］